

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 9 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520685

研究課題名（和文）在日インド人社会における空間の再編成—脱領域化と再領域化に着目して

研究課題名（英文）Spatial organization in Indian society in Japan: focusing on
De-territorialization and Re-territorialization

研究代表者

澤 宗則（SAWA MUNENORI）

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：40235453

研究成果の概要（和文）：ギデنزの近代性に関する理論を援用して、在日インド人社会がグローバル化のもとで再編成される過程を脱領域化と再領域化の概念を用いながら考察した。グローバル化した経済のもとでの IT 産業と関連づけながら、インド人移民の特徴を明らかにし、IT 技術者を中心にしたインド人移民の動向を分析した。インド人移民の新たな集住地である東京都江戸川区において、新しいコミュニケーションツールであるインターネットを媒介にして、対面接触によるコミュニケーションを前提とした古くからの定住地とは異なる「自分達の場所」が創造されている過程を調査した。

研究成果の概要（英文）：I used the theory about Giddens's modernity, and I considered the process in which Indians community in Japan was reorganized under globalization, using the concept of de-territorialization and re-territorialization. Relating with the IT industry under the globalized economy, I clarified the feature of Indian immigration and analyzed the trend of Indian immigration centering on IT engineer. In Edogawa-Ku, Tokyo where a new living-together-in-a-concentrated-community place of Indian new migrants, I investigated the process in which "their own place" different from the longtime permanent home on condition of communication by face to face contact through the Internet that is a new communication tool.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：移民・エスニシティ・グローバル化・インド系移民・脱領域化・再領域化

1. 研究開始当初の背景

日本地理学会において「移民・移住とエスニシティ」研究グループが設置されるなど、地理学においてエスニシティ研究はきわめて重要な研究分野となりつつある。在日外国人に関する研究は、韓国・朝鮮人や中国人を対象として、多くの蓄積がなされてきたものの、それ以外の在日外国人は少数であるため、最近になってフィリピン人、ブラジル人などを対象とする研究がようやく行われるようになったに過ぎない。

また、これらの研究の多くは差別・抑圧された側面を重視してきたことから、その多くは従来のステレオ・タイプの「在日外国人」の概念の再生産が行われるに過ぎない。また、定住地から出身地への影響を考察した研究も皆無に等しい。

在日インド人社会を対象とする研究は、外国人研究者による研究においても少なく、日本人研究者においては、申請者以外では、金谷(1964)と富永(1999)によるものだけである。従来のエスニシティ研究の多くは、「華僑」・「在日コリアン」や「外国人労働者」として差別・抑圧された側面を重視してきた。

しかし、日本におけるエスニック集団はかかる存在ばかりではなく、在日インド人のように開国以降における日本の近代化の中で貿易業を中心とした重要な役割を果たすなど、独自のエスニック社会を形成してきたものもあることも事実である。そこでは従来の研究で重視されてきた視点だけでなく、本研究が重視する、アイデンティティやネットワーク(資源配分に関する権力構造)といった社会的・文化的な視点でとらえることが重要であると考えられる。またインドより呼び寄せられた妻(主婦)同士の交流や場所との関わりを男性の場合と比較することにより、従来は男性中心主義的な移民社会の理解に異議申し立てを行う必要がある。

2. 研究の目的

開発途上国から先進工業国へと越境する移民達は、どのような社会と空間をつくりあげ、それは経済のグローバル化とどのような関わりがあるのだろうか。本研究の目的は、グローバル化のもとでの移民の空間の再編成に関するアプローチに関して、脱領域化と再領域化の概念の有効性を提唱することである。

そこで、グローバル化経済の影響を最も受けている開発途上国の一つであるインドからの移民社会を対象に、その有効性を検討した。インドは経済自由化が進められた1980年代以降、特に1991年の「新経済政策(new economic policy)」への転換以降、先進国からの外資導入により急激な経済成長を経験

した。これは先進国を頂点としたグローバル化経済にインドが組み込まれつつあると、とらえることが出来る。同時に、従来は商人や単純労働者が中心であったインド系移民社会も、現在はIT技術者の急増により大きく再編成されている。これらは経済のグローバル化による空間の再編成と、不可分な関係にあると考えられる。

グローバル化とは、一般的には「国家を超える社会現象の拡大化」を意味し、「時間と空間の圧縮」(ハーヴェイ,1999)からもたらされる現象と考えられている。輸送機関の高速化とITによる通信技術の発達により、「時間と空間の圧縮」が加速度的に進む。これは様々な地域を同一化、標準化させる原動力となる。しかし同一化作用に対して差異化作用が同時に生じる。例えば、「時間と空間の圧縮」により資本の空間移動が容易になるが、これは必ずしも空間の等質化をもたらすのではない。むしろ空間の差異に関して、資本はますます敏感になり、資本を引きつけるような「場所(place)」を生産しようとする働き(生活環境やインフラの整備、場所のイメージの改良など)が生じる。

この結果、資本誘致を巡って、都市間や国家間などで空間的競争が生じる(ハーヴェイ,1999)。このように、グローバル化は同一化と差異化のせめぎ合いを不可避的に生じさせる。このようなせめぎ合いは、国民国家の揺らぎ(脱国家化)とそれに対抗する再国家化といったナショナルスケールのみではなく、下位のリージョナルやローカルな空間スケールにおいても生じると考えることができる。

そこで、本研究では、空間スケールの階層性に留意しながら、インド移民社会におけるナショナル、リージョナル、ローカルの各スケールの空間が、グローバル化のもと再編成される過程を対象とし、イギリスの社会学者ギデنز(A.Giddens)の近代性(modernity)に関する社会理論を援用した、脱領域化(de-territorialization)と再領域化(re-territorialization)の概念の有効性を提唱したい。

3. 研究の方法

(1)エスニック集団・グローバリゼーション・場所の関係についての理論構築を行った。近代性に関するギデنزの社会理論を援用して、在日インド人社会の空間がグローバル化のもとで再編成される過程を脱領域化と再領域化の概念を用いながら考察した。

(2)マクロスケールにおける基礎統計の収集と分析—日本におけるインド人移民社会の位置付けを行った。インド人の在外居住地の分布とその変化を、既存の研究およびイン

ド政府の統計資料を用いて明らかにし、ホスト社会としての日本の意味と特殊性を解明した。全国レベルでみた在日外国人の国籍別居住地・就業地分布、就業構造およびその変化に関して、法務省資料・国勢調査結果・集住地での自治体独自の統計を用いて、統計的分析を行うとともに、日本政府の在日外国人政策の変遷とその血統主義的特色を示した。

(3)東京・横浜と神戸におけるインド人社会の聞き取り調査を行った。東京では言語集団ごとについていくつかのインド人コミュニティが立ち上がりつつある。その設立総会に参加したカルナータカ州出身者の行事などに引き続き参加するとともに、個人への詳細なライフヒストリーおよびメンタルマップの聞き取りを行った。また、以前より聞き取り調査を行っているインド人に対し、引き続き追跡調査を行った。横浜市では、インド資本の誘致が政策的に強力に行われ、その一環としてインド人学校の誘致を行った。これはグローバルシティ(Global city)東京とのインド資本の誘致を巡る都市間競争である。ここで行政主導によりどのようにインド人集住地が形成されるのか、あるいは形成されないのかに関し、集住地を成立させる条件について考察を行うとともに、コミュニティ成立の追跡調査を行った。

神戸では、従来から宗派別コミュニティが確立されている。そこでは、伝統的な宗教行事が行われ、あたかも出身地でのインド社会そのものの再現の感がある。しかしながら神戸生まれのインド人が多くなるにつれて、エスニシティの持つ意味はそのまま継承されるのではなく、常に新しい意味を再生産されながら現在意味のあるものは残り、そうでないものは消えてゆく。そのプロセスを歴史的に見てゆくことにより、出身地でのインド社会から定住地でのインド社会へどのように発展・変化してゆくのかを分析した。

4. 研究成果

本研究では経済自由化以降、特に1991年の新経済政策以降のインドの地域変化を、経済のグローバル化による空間の再編成の一環ととらえた。インド人の移民社会も、グローバル化と密接に関わりながら、大きく変容している。そこで、グローバル化の下での、移民の空間の再編成に関するアプローチに関して、ギデنزの近代性に関する社会理論を援用した脱領域化と再領域化の概念の有効性を検討した。インド人移民達の空間がナショナル、リージョナル、ローカルの各スケールにおいて、グローバル化のもと脱領域化かつ再領域化されながら再編成される過程を考察した。

新経済政策以降、インドへの外資の流動性が高まり、工業化への投資が積極的に行われ、

自動車産業とIT産業が急成長し、欧米・日本を中心としたグローバル化経済にインドが組み込まれている。ナショナルスケールの脱領域化に関しては、国境を越えた資本・労働力(移民)・情報の流動性が高まり、国家の枠組みが緩くなる傾向を認めることが出来る。これに対して、インドへの外資誘致やNRI(Non resident Indian)の資本環流のためには、インド政府がインフラ・金融市場・労働市場などの条件整備を行うことが不可欠となる。このように、流動性の高い外資をインドに誘致するためには、必然的に国家主導となることにより、再領域化(再国家化)が同時に生じるのである。また、移民の受け入れ国の移民政策により、国籍や労働条件により、受け入れる移民の選択を行うことも、ナショナルスケールにおける再領域化(再国家化)といえる。

先進国からの投資先としてインドの価値が高まるにつれ、資本はインドの中でもインフラ、市場、税制、労働力などが整備された大都市・地域へと流動する傾向が高まった。輸送機関の高速化とITの発展、および立地規制を政策的に緩和することにより、空間的障壁が重要でなくなるにつれ、立地条件に関してリージョナルスケールでの脱領域化が進んだ。これに応じて、資本、特にFDI(Foreign Direct Investment)の誘致をすするため、州政府などがインフラの整備などをおこない、産業振興策が積極的に行われている。このように、資本を引きつけるような魅力のある「場所」を生産することにより、資本をめぐる都市間競争が高まってゆく。その結果として、リージョナルスケールでの再領域化が必然的に進む。

インドの経済成長において、IT産業が重要な牽引力の一つであり、インフラ整備の状況の良いベンガルールなどに新規立地が集積する傾向が強い。その結果、リージョナルな再領域化が進むと同時に、インド国内での地域間格差が拡大再生産されることとなる。

経済のグローバル化に関し、資本が展開する際には具体的な場所を必要とし、それは先進国では多国籍企業の中核管理機能の集積したグローバルシティである。グローバル化した経済は、先進国(特にグローバルシティ)での労働市場の国境を越えた拡大をもたらす、開発途上国からの移民を増大させた。

このような労働力の流動性の高まりによってもたらされた労働市場の脱領域化は、移民間および移民と出身地間の情報の流動性を高めた。それは、移民によるインドへの送金、さらに、先進国で成功した移民によるインドへの出資や出身地などでの起業という形で、資本の流動性を高めることにつながっている。

先進国に定住し始めた移民は、生活空間と

しての定住地を必要としている。移民が増大するに従い、彼らの文化に再び埋め込まれた集住地の形成という形で、ローカルな空間の再領域化が進むのである。このように移民の空間では、流動性を示す脱領域化とローカルな文脈に根ざした再領域化が同時に進行している。

グローバル化とは、「近代性の帰結」として、「時間—空間の圧縮」を加速度的に押し進め、ナショナル、リージョナル、ローカルの各スケールの空間の文脈上にあった社会的行為を上位の空間スケールの中に位置付けることにより、各スケールの空間の脱領域化と再領域化をやすみなく続けることである。

これらの過程を通じて、各スケールの空間はより上位の空間そしてグローバルな空間に次第に組み込まれてゆく。以上の考察を通じて、グローバル化のもとでの移民社会の空間の再編成に関するアプローチに関して、脱領域化と再領域化の概念の有効性が確かめられよう。

以下で記述するように、雑誌論文3本、書籍5冊、学会発表4件を行った。研究目的や意義が人文地理学の分野のみならず南アジア研究や文化人類学の分野でも高く評価されているので、さらに一層の研究成果を挙げるために調査と分析を進める。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①澤 宗則, グローバル経済下のインドにおける空間の再編成—脱領域化と再領域化に着目して, 人文地理, 62, 2010, pp. 132-153, 査読有
- ②澤 宗則・南埜 猛, グローバルシティ・東京におけるインド人集住地の形成—東京都江戸川区西葛西を事例に, 国立民族学博物館調査報告, 83, 2009, pp. 41-58. 査読有
- ③SAWA Munenori & Minamino Takeshi, Emerging of An Indian Community in Tokyo: A Case Study of Nishikasai, The Indian Geographical Journal, 82-1, 2008, pp. 7-26. 査読無

[学会発表] (計4件)

- ①澤 宗則, インド郊外農村の社会変動, NIHU (人間文化研究機構) プログラム『現代インド地域研究』2011年度国内全体集会「インドにおける経済発展—都市・農村の変動—」2011年11月27日、広島大学
- ②澤 宗則, インドの山岳地帯のツーリズムと地域社会の変容—グローバル化とポストコロニアルの観点から、2011年度 HINDAS (広島

大学現代インド研究センター) 第2回研究集会「新興経済大国インドにおける地方の発展—山岳州ウッタラーカンドの挑戦」、2011年7月3日、広島大学

③澤 宗則, グローバル経済下のインドにおける空間の再編成、2010年度 HINDAS (広島大学現代インド研究センター) 第1回研究集会「都市・農村の発展と社会変動」、2010年7月4日、広島大学

④澤 宗則, 移民研究における脱領域化と再領域化の概念の可能性—インド移民を事例として—、日本地理学会、2009年3月、帝京大学

[図書] (計5件)

①立川武蔵・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座 4 南アジア』朝倉書店、2012、472ページ

②山下清海編、『現代のエスニック社会を探る—理論からフィールドへ—』学文社、2011、224ページ

③高原明生・田村慶子・佐藤幸人編『現代アジア研究 第1巻 越境』慶應義塾大学出版会、2008、472ページ

④山下清海編、『エスニック・ワールド—世界と日本のエスニック社会』、明石書店、2008、257ページ

⑤ H. Okahashi (eds.), Emerging New Industrial Spaces and Regional Developments in India, Manohar, Delhi, 2008, 195p.

[その他]

ホームページ等

<http://indiansinjapan.blog73.fc2.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤 宗則 (SAWA MUNENORI)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号：40235453

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者